観光文化
Tourism & Culture

VOL. 197
2009 September

財団法人日本交通公社

特集◎ 山岳宗教都市・高野山 — その美と歴史文化

◆巻頭言

高野山　その美と文化　永坂 嘉光……①

◆特集

- 高野山の「魔力」　五十嵐 敬喜……②
- 高野山の歴史と密教美術の神髄　山口 浩司……⑥
- 弘法大師が伝えた聲明　井川 智雄……⑩
- 森林セラピー 世界遺産高野山 千年の森　楠 博州……⑭

◆視点

- 温泉地の魅力向上のための財源を考える —入湯税のあり方とは　朝倉 ばるみ……⑱

◆連載

Ⅰ あの町この町　第35回

差金が右腕 — 岐阜県飛騨市古川　池内 紀……㉒

Ⅱ 風土燦々⑧

町住みのリアル・ハンター（前編）— 静岡県浜松市天竜区　飯田 辰彦……㉘

Ⅲ ホスピタリティーの手触り 56

エアラインの使命　山口 由美……㉚

◆新着図書紹介……㉜

角館・馬つなぎ石

江戸時代の一六二〇年（元和六年）、芦名義勝によって角館武家屋敷が形成され、後に佐竹義隣の世を迎えた。格式の高い武家の象徴は薬医門をかかげ、黒塗りの簓子塀（ささらこ）が巡らしてある。江戸期より連綿と続く景観からは武士の息づかいさえ聞こえてくる。私が訪れた時、雨の降りそぼる風情は当時に迷い込んだような錯覚をおぼえた。三千坪を有する青柳家は上級武士だっただけに、武器蔵には貴重な武具や文献が数百点収蔵されている。並びの石黒家ほかにも歴史的文化遺産が多数見られ、旅人に秘蔵品を公開して好評である。また商家の代表格・安藤醸造は創業一八五三年（嘉永六年）で、レンガ造りの蔵と蔵座敷は貴重な歴史遺産として今に伝わる。

今回の「馬つなぎ石」が青柳家の門前にひっそりと佇（たたず）んでいて目を引く。江戸時代の乗り物といえば籠と馬の時代であっただけに高さ五十センチほどの石の上から乗り降りした様子が想像され、微笑ましくも佳（よ）き時代がしのばれてならない。

（写真・文　樋口健二）

高野山　その美と文化

写真家・大阪芸術大学教授　永坂　嘉光

高野山は空海が開山し、千二百年を迎えようとしています。これを機に中門の再建等、伽藍を再生し、古式豊かな時代美の再現に取り掛かっています。

仏教がインドで興り他教に追われ盛衰を繰り返しながら、ヒマラヤの山々を越え、中国に伝わり、やがて唐の末期に密教が衰退し始めたころに入唐していた空海が、名僧・恵果阿闍梨から密教の本質を伝授され、多くの経典や文物等を日本に招来し、帰国後には日本各地にその思想や技術を伝えることとなったのです。

帰国後九州太宰府に停められ、やがて京都・高雄の神護寺に入山し、ここを密教道場として開き結縁灌頂を開壇します。やがて、高雄を離れ、空海は都から遠く離れた紀伊山地の高嶺にある高野山を自己の目指す密教道場として開き、大規模な伽藍の造営にかかるのです。インドで興った密教が時を経て、極東の小さな島国・日本の深山幽谷の高野山で再現され、今もなお、その形が生き続けていることは人類の奇跡でもあると思います。

空海は密教の根本思想でもある「五大」を、高野山で初めて五輪塔として造形化しました。地・水・火・風・空を意味した五大を五輪塔に刻んでいます。これは、宇宙を形成する五大元素を意味しています。いわゆる自然が営まれる原点です。「地」は基礎・基盤・大地であり、「水」は水がなくては生命が宿らない、「火」は生き物の根源であり、「風」は気候を創り、種子を運ぶ「空」がなければ存在すらできない、これらが個性を持ちながら混じり合い五大となり、自然の生命の原点を創り上げています。

空海は若き日、高野山に足を踏み停めています。その折に、水がわき出て緑が豊かな原野を目の当たりにし、ここは生命が宿る原野だと、思ったと思います。高地であり雨が多い湿潤な高野山はこの地独特の風情を醸し出し、温度が変容する季節の節目のころには、霧に包まれた根本大塔が雲間から顔を出す、幻想的な墨絵の世界そのものが見られるのです。その墨絵の世界の中で密教の塔・根本大塔の朱が異彩を放ちます。

雨の後は、深い霧に包まれ、物音一つしない静寂な朝を迎えます。私は風景との一期一会の機会を感じると、とっさに大型カメラを持ちその地に向かいます。

霧雨や濃霧が伽藍の堂塔を覆い隠すと、現世の世界から異次元の世界へ誘われるようです。霧の中の黄昏時は、灯火が反映して神秘的な世界を演出します。空間の中から空海の声明が聞こえてくるような微妙な情景が展開するのです。

雨が上がり晴れ間が見えてくると、鮮やかな朱塗りの根本大塔が宙にそびえ、厳かな霧に包まれた世界から晴れた青空にくっきりと現れます。インド、チベットを源流にした色と形をほうふつさせ、高野山独自の密教文化に彩られた美が見られるのです。

高野山には空海が造営し、そこに住み修行したといわれる「伽藍」と、空海が入定し、今も生きていると伝えられる「奥の院」の二つの聖域があります。特に空海入定の奥の院に向かう参道（約二キロ）には鎌倉時代から近代までの武将等をはじめとした大きな五輪塔等が群をなし、また地中に埋没した墳墓等、何十万基というおびただしい数の方々の墳墓があり、日本の総菩提所を形成しています。高野山の栄枯盛衰を語る遺跡であり、日本の歴史を含み込むこのような墳墓はどこにも存在しないでしょう。

現代の高野山は世界遺産に登録されてから、世界の多くの方々が訪れるようになりました。空海が密教道場として開創した高野山に空海が自ら入定され、今日まで千二百年間、空海の永遠の命（空海は生きている）について信仰され続け、世界にも類を見ない信仰のメッカともなりました。

今後、未来に向かって偉人・空海の思想を基に高野山は世界に向かって新しい形を形成していくでしょう。

（ながさか　よしみつ）

山岳宗教都市・高野山
――その美と歴史文化

高野山は、約千二百年前に弘法大師空海によって開かれた真言密教の修行道場で、全国に広がる高野山真言宗の総本山。二〇〇四年（平成十六年）には、『紀伊山地の霊場と参詣道』として世界文化遺産に登録された。今号では、国際宗教都市・高野山に刻まれた歴史と、育まれてきた自然、文化・宗教などの視点から、高野山の魅力を紹介します。

特集 1

高野山の「魔力」

法政大学法学部教授　五十嵐　敬喜

聖地

人はなぜ「旅」に出るのだろうか。人には取りあえず今の生活、場所、状態から逃れたい、離れたいということがある。それを越えてどうしても行きたいという積極的な動機付けがあることもある。ではなぜ、どこに？　この問いに対する回答はさまざまである。「ドキドキ」するような刺激がある。あるいはそれと正反対に、深い癒やしを与えてくれる。不思議発見として興味がある、または勉強になる。故郷や昔行ったことのある懐かしい所。単に面白そうだから。また珍しい風景、食べ物やお土産品があるというようなこともあろう。時間や費用、あるいは体力などの制約を超えてどうしても行きたいと思わせる吸引力、それを「魔力」と名付けよう。私にとって高野山は最大級の「魔力」を持っている。

高野山を一言で言えば、そこは「聖地」であり、しかも「真言密教」の聖地である。聖地は、そこで祭られる何者か、神、仏、霊の存在と、これを敬う、すがる、祈る、鎮めるなどという思想や心情を持つ人々との相互関係で成り立つ。そしてその相互関係が維持されるには、多分二つのことが必要であった。一つは、神、仏、霊などの中心となる存在だけでなく、それに関連するストーリーがあるということである。高野山でいえば弘法大師空海、真言密教、それと入定信仰というようなものがあり、そのストーリーが大きければ大きいほど、また多様であればあるほどその関係は強くな

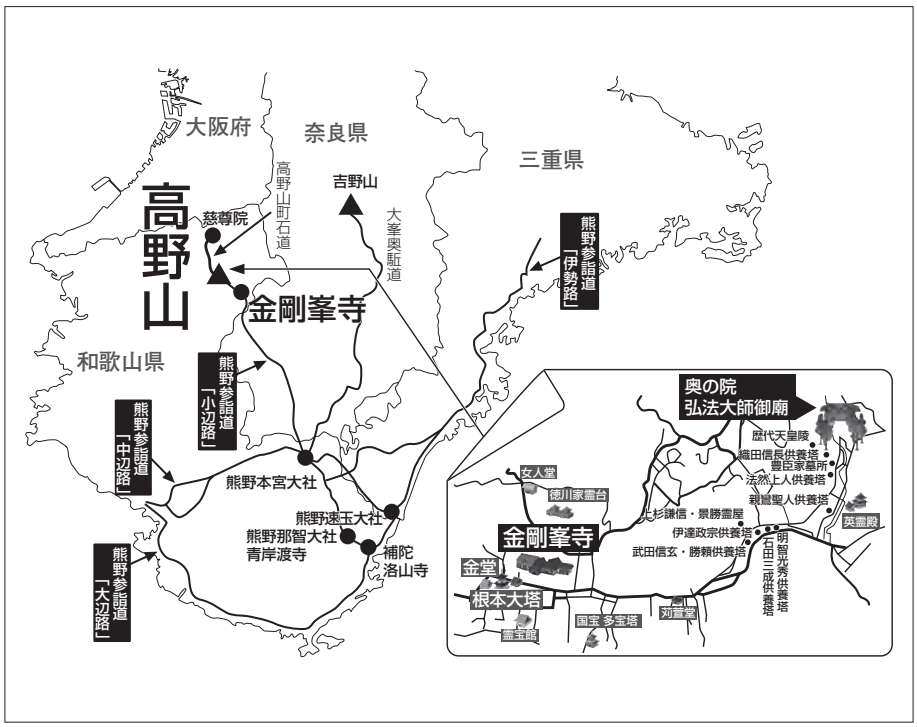
り、しかも時間と事件でつくられる歴史はそれをどんどん豊穣にしていくのである。創建当時とほぼ同じ状態で残っているものは、当時の姿を確認できるものとして素晴らしい。また逆に、大半が失われた廃墟は往時をしのばせるものとして想像力をかきたてる。

想像力に関して言えば、それはまだ謎解きがされていない、なぜそこにそのようなものが存在したか「未知」であるというほうが膨らむというのも自然である。もう一つは、聖地と言うためには「空間」が必要である。例えばそれはたった一つのマリア像というようなこともあるが、一般的に言えば、山や丘、あるいは海といった自然と建築物や工作物で構成される。空間は人や物の存在とストーリーに、荘厳性、神秘、畏敬、あるいは美しさを与えるのである。

魔力の根源

高野山は空海が八一六年（弘仁七年）、今から約千二百年も前に時の嵯峨天皇から真言密教の根本道場として下賜された場所であり、真言密教を具体化する「伽藍」と、空海が入定している奥の院という二つのセンターが参詣道によって結ばれている。

それでは何故ここは人を惹きつけるのか。魔力の本質は、少し微妙な言い方をすれば「解らない」ということにあり、それ自体が強烈な求心力となる。空海はその最大級の未知数なのである。空海自身の語るところによれば、真言密教は宇宙の一切の根源たる大日如来から発する。この大日如来を具現化した毘盧遮那仏からその弟子の金剛薩埵（たつ）――龍猛（りゅうみょう）――龍智――金剛智――不空――恵果――空海というようにつながり、彼自身が「即身成仏」、つまり「生きているまま仏」になった。現代のように何でも科学的証拠を要請する「知」の世界からすれば、これだけでも摩訶不思議であろう。さらに空海は仏になっただけでなく「今でも生きている」（そ



れゆえ維那さんが毎日食事をささげ、季節ごとに衣を着せ替えている）とか、これから五十六億七千万年後に弥勒菩薩となって復活するとか言われると、不可知部分は倍加する。

神の申し子であるキリスト、あるいは仏となった釈迦は一冊の本も書かなかった。聖書あるいは経典といわれるものはすべて弟子たちが口伝えに聞いたことを後で文字化したものである。然るに一人空海は膨大な著作を残した。この著作物には宗教関係以外にも文学論、辞書などおよそ宗教とは関係のないようなものもある。空海は本来言葉を超える神仏の世界を言葉によって明らかにしようとしたのである。

さらに書家、詩人はもちろん、ダムを造る技術者でもあった。実践家としての空海の最終面目は日本の改造にある。山折哲雄『空海の企て』（角川選書）によれば、

「政治の世界に積極的に進出して、日本の国の形をつくろうとした空海。密教思想を注入することで、国家を安定軌道に乗せようとしたのである。そのため彼は大内裏の中心に『真言院』をつくることに成功するが、それは嵯峨天皇の支援を得たからである。この建物は、天皇の身体に加持祈祷を行って悪霊を祓うためのものだった。マンダラを掲げて五大明王を祀り、毎年正月の第二週目に『後七日御修法』を行った。国王（天皇）の健康管理を通して、国家の安泰を祈願しようとした」

のである。

空間の質

空海は外八葉で囲まれたこの地で周囲を結界した上で根本道場を建立した。その後幾度か重要な建物を火事で消失するというようなこともあったが、現在、高野山は先に見たように二つのセンタリングが参詣道で結ばれ、その両端に寺院と数珠屋やお土産屋など寺院の町にふさわしい庶民の建物が軒を連ねている。この骨太の都市計画が威厳、荘厳、神秘さの根拠である。伽藍は金剛峯寺、御影堂、金堂、根本大塔などからなっているが、見逃せないのは、ここには仏だけでなく神仏習合の象徴のように丹生都比売明神・狩場明神という神社が祭られているということである。

真言密教は偏狭な教えではない。それは祖霊信仰などの日本の民俗信仰、あるいは行事などを土台としてあらゆるものを抱擁しながら花開いている。平安末の歌人「西行」の庵と桜がある。西行は高野山の僧であり、「内談義」など真言密教の本質的な儀式を確立した。またここが「町石道」の基点であり、参詣道をたどっていくと、空海が入定している奥の院に着く。驚くのは、ここには天皇家はもちろん織田信長、武田信玄、豊臣秀吉ら死を賭けて戦った戦国大名が鬱蒼とした樹林の中に静かに眠るほか、真言密教とは相容れない親鸞、法然といった名だたる宗教家を含む、およそ有名無名二十万を超える人々の墓地となっているということだ。奥の院は世界でも最も大きな墓地であり、最も包容力のある墓地であり、また最もドラマチックな墓地と言えるだろう。

毎年夏、「死」を覚悟した空海が若き日に留学した長安で「見た」として始めた「万灯会」が開かれる。暗闇、読経、そして、ろうそくの光の中で死者と生者の壮大な無言の「対話」が繰り広げられる。

掟

ここにはお遍路さんや観光客が年間百万人以上も訪れている。その顔、祈る手は日本

で最も美しいものの一つだ。だが、最近これが少しかき乱されている。その第一は、自動車社会ができてきたということである。高野山では本質的に「歩くこと」（歩行）が重視されなければならない。「同行二人」というのは真言密教の中興の祖、覚鑁上人（一一一四年〔永久二年〕、二十歳の時に高野山に入り、学問所としての伝法院を建立したが、のちに金剛峯寺との対立が深まり、下山して根来寺を建立）が創ったものである。それ以降、お大師様となった空海は、罪の償い、浄土への願望、生まれ変わりを願うお遍路さんとともに全国を歩くようになった。お遍路の出発点であり終着点である聖地が自動車に占領されているのは悲しいことだ。

第二は、人口の減少である。高野町の人口は一九六〇年の九、三二四人をピークに、二〇〇〇年には五、三五五人とほぼ半減し、以降毎年百人ずつ減少している。

寺院と庶民の建物の共存の前提として、ここでは、日本では極めて珍しくなった「総有」概念が生きている。明治以降、日本は「土地所有権」の絶対化をうたい、世界でも有数の強い所有権を確立した。京都などに見られるように、「聖地」の周辺に所かまわず高層マンションやラブホテルなどいかにもふさわしくない建物が建つのは、この何をしてもよいという強い所有権の表れである。しかし高野山ではこのような絶対的土地所有権は認められず、本山が土地を持ち、全員でその利用方法を考えるという「総有」形態が維持されてきた。明治以降長年のタブーであった「女人禁制」が解かれ、庶民はこの総有のもと、「借地権」という形で家を持ち、家族とともに生活するようになったのである。

乱開発が抑えられているのはこの総有が大きな力を持っているからであるが、最近、自分で自由に家を建てたいという欲求が増えてきて、全国の地方都市を襲っている「過疎化」という現象がここでも顕著になっている。このままでは聖地は誰もいない空虚な空間になるかもしれない。

世界遺産

二〇〇四年、高野山は三つの「山岳霊場」およびこれらを結ぶ「道」の一つとして「世界文化遺産」に登録された。

三つの山岳霊場とは、修験道の「吉野、大峰」、神仏習合の「熊野三山」、密教の「高野山」であり、道とはこれらの霊場を結ぶ大峯奥駈道、熊野参詣道（小辺路、中辺路、大辺路、伊勢路、熊野川）、高野山町石道の「参詣道」（巡礼路）である。

これがなぜ世界遺産なのか、ユネスコはその登録基準のうち、

(ii) 建築、都市計画、景観設計などの発展に大きな影響を与えた人間的価値観の交流を示している。

(iii) 現存する、あるいは既に消滅してしまった文化的伝統や文明に関する稀有な証拠である。

(iv) 人類の歴史上の重要な段階を物語る建築様式、またはその建築的技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本である。

(vi) 顕著で普遍的な価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある。

の四つに該当するとした。

魔力は地域と時間を超え世界中にひろがった。空海は今も生きている。高野山に行けば誰でも会うことができる。高野山観光の最大の幸福がそこにある。

（いがらし　たかよし）

特集２

高野山の歴史と密教美術の神髄

高野町教育委員会　教育長
山口　浩司

世界遺産 高野山の歴史

「高野山」は山の名前ではない。古くは弘法大師空海が開創された金剛峯寺の山号であり、現在は千二百年の歴史と伝統を誇る宗教都市全体を指す。

人口約四千人の山深い町に、百十七を数える寺院が荘厳なたたずまいを見せている。自然があふれる森厳な環境に、伝統的な法会と僧侶の姿が日常的に融和し、古くからの伝承や行事が厳格に行われている。

全国的にも珍しい「時の鐘」が、千年以上も前の重厚な響きを高野山に充満させる時、人々は連綿とした歴史の中にいる自分を再確認するのである。

「どこからどこまでが世界遺産なのですか?」という質問に対し、「鐘の音が聞こえる所まで全部です」と答えて深く納得される聖地はそんなに多くないと思う。

弘法大師は高野山を「法身の里」と称し、その風光をこよなく愛した。法身の里とは、山上のすべてのものは、大宇宙の根本的生命である大日如来のあらわれであり、「いのち」と「こころ」を宿していることを意味している。法身の里に身を置くことで、宇宙のいのちを身近に感じることができる。これが高野山を密教修禅の道場に選んだ最大の理由であり、開創の意義がここにある。

高野山の危機と文化財

八一六年（弘仁七年）に開創されて以来、高野山は真言密教の総本山としての威厳と風格を保ち続けてきたわけではない。復興できないと思われるほど疲弊することも何度かあった。近年では明治維新が挙げられる。

明治維新の激動は高野山にとって想像を絶するものであった。神仏分離令は真言密教の根本教義とも言える本地垂迹説を真っ向から否定し、政治と密接な関係にあった仏教を排斥する思想は廃仏毀釈の嵐となって高野山を急襲した。また、一八六九年（明治二年）の版籍奉還による寺領二万一千三百石の奉還、一八七三年（明治六年）の上地命令により完全に経済的基盤を失った高野山に追い打ちをかけたのが、一八八八年（明治二十一年）の大火であった。

おびただしい数の寺院が廃寺に追い込まれ、残った寺院も合併を余儀なくされたため、幕末には六百八十を数えた山上の寺院は百三十カ寺まで激減し、高野山には法灯をようやく護るだけの力しか残らなかったのである。

そんな絶望的な状況を救ったのは、国内最古級の大学である高野山大学林に全国から集結したあまたの勤勉学生の熱気であった。数々の高僧を輩出した高野山は、「学山高野」の名で全国に広く知られるようになり、次第に復興の緒に就くことができたのである。

さらに、高野山が現在まで広く信仰を集め続けることができた重要な要因に文化財がある。国宝・重要文化財に指定されている文化財は二万八千点を数え、今後、指定される可能性がある無数の文化財とともに、高野山の信仰の語り部として重要な位置を占めている。高野山が「宗教芸術の殿堂」「山の正倉院」などと呼ばれるゆえんがここにある。

真言密教を代表する文化財

①不動明王

明王は密教独特の尊格であり、如来や菩薩では教化が難しい悪しき衆生に対し、真言や陀羅尼の力で煩悩を打破し、悟りの世界に導く働きをする。その像容は勢いよく燃え盛る真っ赤な火焔を背負い、忿怒相で激しい体の動きとともに威圧するような厳格な姿で表現される。

なかでも不動明王は、真言密教の根本仏である大日如来の化身としてあらわれる。眼を怒らせ、右手に宝剣、左手に羂索を持つ恐ろしい姿であるが、その深い慈悲があらわれた表情と絶大なご利益により、「お不動さん」の愛称で宗派を超えて広く信仰を集めてきた。

①重文 不動明王坐像（金剛峯寺蔵、平安時代）
大伽藍不動堂の本尊であり、運慶作八大童子立像とともに安置されていた。
左目を細め、口元からは上下の牙が露出する。平安時代後期の作

②大日如来

大日如来は真言密教における根本仏である。その尊名は大日の智恵の光が太陽の光とは比較にならないほど大きく、慈悲の活動が活発で永遠に不滅であることに由来している。

大日如来の姿は釈迦如来や阿弥陀如来のような出家の姿ではなく、うず高く髪を結い上げ、五仏をあらわした宝冠をつけた菩薩形が特徴的である。光背は丸く大きな日輪をあらわし、諸仏諸尊を統一する最高の地位を象徴する威厳に満ちている。

③両界曼荼羅

真言密教の教義は、経典や注釈書だけで全体を理解することは難しいため、古くから曼荼羅が重要視されてきた。その名は、サンスクリット語で中心を意味する「マンダ」と所有することを意味する「ラ」の合成語であり、「大宇宙の本質を諸仏の配置によって表現したもの」と言える。

両界曼荼羅は「胎蔵界曼荼羅」と「金剛界曼荼羅」から構成される二幅一対の曼荼羅である。「胎蔵界曼荼羅」は真言密教の根本経典である大日経をもとに、宇宙の真理と広がりをあらわす「理」の世界を図示したものである。「金剛界曼荼羅」は金剛頂経をもとに、すべてのものに宿る仏性を原動力として悟りを開く過程と、仏の方から衆生を救うための過程をあらわす「智」の世

②重文 大日如来像（金剛峯寺所蔵、鎌倉時代）
大日如来は印相で胎蔵界と金剛界の２種に区別される。本図は智拳印を結んだ金剛界大日如来であり、伏し目がちな切れ長の眼から理知的な印象が感じられる

金剛界曼荼羅

胎蔵界曼荼羅

③重文 両界曼荼羅

弘法大師が中国から持ち帰った曼荼羅の系統である彩色原図曼荼羅としては現存最古のもの。向かって右に胎蔵界、左に金剛界を配置する。平家物語には平清盛が自らの頭血を混ぜて胎蔵界曼荼羅の大日如来に彩色したと記されていることから、「血曼荼羅」の異名を持つ。縦横約４メートルという大作に清盛の思いが込められた逸品である

界を図示したものである。

④八大童子立像

高野山が管理する数多くの文化財のうち、一般的に広く支持されているという意味では「運慶作八大童子立像」が群を抜いている。それは、宗教、芸術、歴史などの壁を超えて人々を魅了する国宝中の国宝と言える。

八像のうちの一躯、鎌倉時代の少年をモデルにしたと思われる制多伽童子立像は、清純な風貌と若々しい肉体を持ちながら、内部に充満した理知的な繊細さは悟りを得た覚者そのものである。しかしながら、澄んだ瞳にも、つり上がった目尻にも、への字に結んだ口元にも大人の濁りが感じられない。どこまでも透徹した少年の表情で、見る者に熱く語りかけてくるのは、自らが忘れかけている純粋さであり、活力であり、正義であり、信念である。

極限まで純粋な人間らしさを強烈に表現する童子像に対峙し、自身を同調させることにより、生まれたままの清らかな精神を思い出させてくれる。

（やまぐち　ひろし）

④国宝 制多伽童子立像（金剛峯寺所蔵、鎌倉時代）

澄んだ眼と通った鼻筋が理知的な表情を強調している。五髻（ごけい）を結い、両肩に薄布を羽織る。右手に宝棒を支え、左手には三鈷杵（さんこしょ）を取る。全身から活発な少年を連想させるエネルギーと、不動の信念が感じられる

特集３

弘法大師が伝えた聲明

特定非営利活動法人ＳＡＭＧＨＡ　代表
井川　智雄

来る二〇一五年（平成二十七年）、高野山は弘法大師空海が高野山を開創して千二百年を迎えます。ご存じのように、高野山は真言密教の総本山として宗教特有の伝統を保持するばかりでなく、文化や芸術などさまざまな分野に影響を与えてきました。

空海という人物は非常に多才な方で、橘逸勢、嵯峨天皇とともに日本の三筆と称され、能筆家であることが知られていますし、戯曲調で書かれた最初の比較思想論の『聾瞽指帰』、日本で初めての文芸評論書といわれる『文鏡秘府論』など、文芸方面でも才能を発揮されました。また、日本で最初の庶民教育機関として綜藝種智院を設立、四国満濃池の修築など、教育、福祉、土木などさまざまな分野において、多大な貢献をされました。その業績はあまりにも多方面にわたり、すべてをご紹介するには枚挙にいとまがありませんが、有形の芸術について申し述べますと、彼が唐の国より請来した数々の絵画や仏具は、後に「密教美術」と称され、数々の国宝や重要文化財を生み出しました。高野山上には文化遺産保存展覧施設「高野山霊宝館」があり、国宝、重要文化財など、未指定品を含め約五万点以上の美術品が収蔵されていると公表されています。いかに膨大な量の芸術品を生み出してきたか、お分かりになることでしょう。

次に、無形の芸術としては、個人的に「密教儀式」が挙げられると思います。儀式は、難解な宗教世界観を「形」にし、大衆が同じ時間と空間を共有して、宗教的感動に包まれることを目的としています。私は、そこに古い形式の「舞台芸術」という感覚が見いだされ、十分無形の芸術と言えるのではないかと考えています。

この無形の芸術が成立するには、時間、場所、諸道具、関連する人々などが不可欠ですが、最も重要なものは、儀式の中心となる導師の「供養作法」と、進行を支える「法則」での読経や聲明です。

聲明とは

「聲明」とは、一体何なのでしょう。簡単に言えば、「僧侶たちが朝夕の勤行時、読経とともに音曲に乗せて唱える無伴奏・単旋律の仏教式讃美歌」と言えます。日本に流入した時期は明確となっていませんが、仏教儀式と切っても切れない関係であるため、恐らくは仏教伝来とともに流入したと考えられています。記録的には、七五二年（天平勝宝四年）に奈良東大寺で執り行われた大仏開眼供養会の模様を記録した『東大寺要録』であり、そこには唄、散華、梵音、錫

杖の聲明曲を、三百人以上の僧侶に配役して、盛大な法要を営まれたことが記述されています。仏教が開花した奈良を中心として唱えられていた聲明を「奈良聲明」と呼んでいます。

平安時代になりますと、中国との国交も盛んとなり、さまざまな宗教や文化が日本にもたらされることとなります。唐より帰朝した二人の人物は、当時の仏教界に新たな風を吹き込みました。天台宗の開祖・最澄、そして真言宗の開祖・空海です。二人がもたらした新しい仏教は、朝廷や貴族から絶大な帰依を得て、爆発的な発展を遂げました。もちろん、新しい聲明も日本へ輸入されることとなりました。前者の聲明は「天台聲明」、後者の聲明は「真言聲明」と呼ばれました。

聲明の音階を視覚的に表現する五音博士

その後は、日本人の手によってさまざまな種類の曲が作曲されていきます。真言聲明では、一〇世紀ころに寛朝僧正という人物によって「中曲旋法」という新しい旋法が考案され、儀式を行う上での重要な曲が作曲されました。一方、天台聲明は、慈覚大師円仁によって事実上創設され、智証大師円珍や安然などによって整備され、一二世紀ごろ良忍によってほぼ大成をみました。それまでは輸入音楽という立場にあった聲明に、日本製の聲明が加わり、新たな独自性を生み出すことになります。天台聲明は、浄土宗や浄土真宗などの聲明へ、真言聲明（特に南山進流）は「新義聲明」と呼ばれる、京都智積院を本拠地とする智山聲明、奈良長谷寺を本拠地とする豊山聲明を誕生させる基盤となりました。

高野山の聲明

真言聲明は、時代とともに唱法が乱れ、それぞれが流派を形成するようになります。その半面、儀式を行う際に聲明の唱法が合わず、不都合が生じるようになります。久安年間（平安時代後期）のころ、ついに御室覚性親王が、聲明の達人十五人を仁和寺大聖院へ招集し、七十三日間にわたって校合した結果、仁和寺相応院流、中川大進上人流（進流）、醍醐寺流の三つを正式な流派とされました。これは、真言聲明の本拠地が奈良、京都であったことを示しています。そのころの高野山は波乱な時代であり、鎌倉期には、奈良の金峯山との争いがもとで、塔堂を閉鎖して離散するなど不遇の時代でした。やがて、宣旨によって僧侶たちが高野山へ帰山し、再び隆盛の道を歩み始めたころ、勝心という人物が、宗祖大師のお膝元である高野山にしっかりとした聲明の流派が存在しないことを嘆き、中川大進上人流の継承者であった慈業上人のもとへ書状を送り、何とか本拠地を奈良から高野山へ移してもらうよう懇願しました。その結果、一二三二年（貞永元年）に本拠地を高野山へ移すこととなり、高野山の別称である「南山」を付けて南山進流と称するようになりました。

諸芸能への影響

天台・真言の二大聲明は、やがて日本の伝統諸芸能へ多大な影響を与える、重要な

存在となりました。それは、聲明そのものの性格にあったようです。その性格を大きく分けてみると、次のようなカテゴリーに分けることができます。

一、「歌う」聲明……旋律の美しさや変化を聞かせる。

二、「読む」聲明……唱える者がその内容を読んで、感動を与えようとする。

三、「語り、願う」聲明……歌詞の意味をはっきり伝えて、感動を与えようとする。

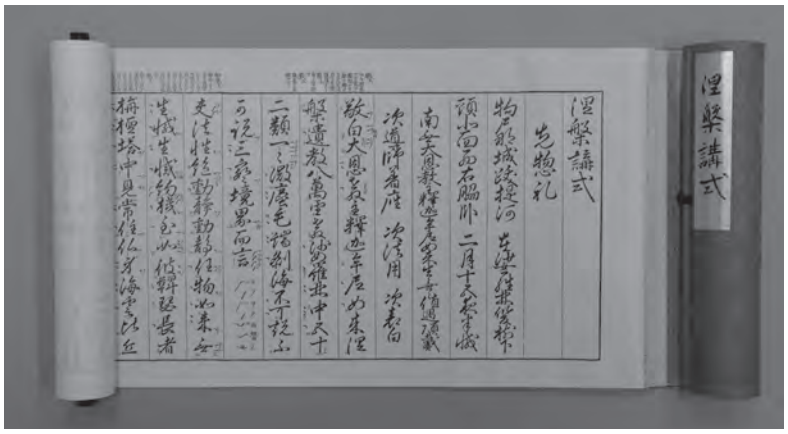
平家琵琶（平曲）や謡曲の曲節は、講式などの「語り、願う聲明」の曲節が直接的に継承されているといわれています。室町時代末期には講式の中の「表白（ひょうびゃく）」と呼ばれる部分の唄い調子が、神事の祝詞（のりと）の語り調子に取り入れられて、祭文（さいもん）が作られました。さらに、祭文の俗化が進み、三味線の伴奏によって語る浪花節や関東節へと発展していきました。和讃は平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて今様歌を生み、仏教の大衆化とともに、聲明の旋律から影響を受けて、「御詠歌」が誕生しました。そのほか、和讃の俗化は各地に音頭を生み、盆踊り唄などが誕生していきました。浄瑠璃節は、説教節や、平曲の曲節の影響を受け、やがて歌舞伎へも影響を及ぼしました。それだけでなく、寺院における盛大な儀式の後には付きものであった「延年」が、猿楽と結びつき、ついには観阿弥・世阿弥親子によって「能」が大成されるに至りました。ご紹介した系譜はごく一部であり、さらに多岐にわたります。聲明は、意外にも「伝統諸芸能の母体的存在」であったことがお分かりいただけるでしょう。

近年の聲明

その後に歩んだ二大聲明の道は、非常に対照的です。天台聲明は、一九四八年（昭和二十三年）に、天台聲明の研究者である吉田恒三先生、天台聲明の正嫡である中山玄雄師が中心となって音律研究所を設立し、天台聲明の保存と研究、西洋音楽における五線譜への変換などの総合的な研究をされ、素晴らしい資料とともに唱法を保存されています。真言聲明は、それぞれの流派が時代の流れとともにその勢いが衰え、相応院流、醍醐寺流は、明治のころまで細々と命脈を保っていましたが、今では聲明の譜本を残して、全く廃絶してしまいました。一方、南山進流は、後世へ伝える伝承者が数えるほどとなってしまいました。これは、後継

聲明曲を集めた『魚山蔓芥集（ぎょさんたんがいしゅう）』

者を大量生産せず、対面伝授による相伝であったこと、教学や事作法を極めることが、僧侶にとっての出世街道であり、聲明に対する取り組みが比較的軽視されたこと、実施される儀式が少なくなり、必要な曲以外はあまり唱えられないようになったことが考えられます。それは、天台宗のように、「宗団としての研究機関」を設立せずに現在にまで至っていることがその証明です。しかしながら、岩原諦信師、大山公淳師、中川善教師などの心ある方々によって、研究・相伝がなされてきました。特に岩原師は、唱法だけでなく楽理についても熱心に研究され、天台聲明のように、西洋音楽の五線譜への変換をもなされた方です。岩原師はご自身の著書で、「不敏の耳でオルガンの音を判断しかねてはまた、幾度かペンを捨て書物を投じて断念せんとしたか」と告白されています。その成果は、南山進流聲明を研究する上で大変貴重な資料となっており、その熱意に感服いたします。



講式は平曲や謡曲に直接的な影響を与えた

お堂から離れて

「聲明は、お堂で唱えるもの」という概念を取り払い、一般の方に気軽に聲明を聞く機会を与えてくださったのは、私の聲明指導者であり、修行道場や高野山大学などで長年にわたって聲明の指導をなさっておられる稲葉義猛師です。天台聲明や新義聲明が東京を中心として精力的に公演が行われていたころ、高野山では「ホールで聲明を唱えるなどもってのほか」と批判される保守派が多数を占め、南山進流聲明を公演形式で披露する機会はほとんどありませんでした。そんななか、稲葉師はさまざまな聲明公演に快くご出演なされ、海外へも積極的に足を運ばれ、高野山の聲明をご披露されました。当時としては革新的な出来事であったと思います。私自身、さまざまな公演にご一緒させていただきました。私は稲葉師の活動に賛同し、有志の方たちとともに、「もっと聲明を聞いていただく機会を作ろう」という思いからNPO法人を立ち上げ、「真言聲明の会」として公演活動を展開しています。

「聲明を聴くと、歌詞などの内容は分からないけれども、何か懐かしい思いがよぎる」とよく言われます。きっと、私たちの体の奥底に流れる「日本人の調べ」が共鳴するのでしょう。南山進流聲明は、まだまだ音楽的な問題や、後継者育成の問題を抱えています。少しずつひもときながら研究・保存し、日本の伝統諸芸能に多大な影響を与えた「日本の調べ」として、より多くの方々にお聴きいただけるよう努力を重ねてまいります。

（いかわ　ともお）

特集４

森林セラピー　世界遺産 高野山 千年の森

高野「めざめ」の森づくり実行委員会
事務局長
楠　博州

はじめに

高野山は、八一六年（弘仁七年）、弘法大師空海によって真言密教の根本道場として開創されました。以降、多くの方が参拝される霊場として千二百年の歴史を刻んできました。高野山は和歌山県の東北部に位置し、高野町の中心地域となります。公共交通によるアクセスは大阪の中心地より約二時間かかる深山です。高野山といっても「高野山」という山があるのではなく、弁天岳、楊柳山、摩尼山などの標高千メートル級の山々が連なる山域の総称です。こうした山々（八葉の峰）に囲まれた東西八キロ、南北三キロ、周囲十五キロに及ぶ標高約八百メートル前後の盆地に、高野山真言宗の総本山金剛峯寺を中心として形成する寺域をはじめ町家などが集中し、約四千人の町民が住んでいます。二〇〇四年（平成十六年）七月には国内で初めて文化的景観という概念が盛り込まれ、『紀伊山地の霊場と参詣道』として世界遺産に登録されました。国際宗教都市として年間百二十五万人（うち宿泊三十一万人）もの人々が訪れています（「二〇〇七年（平成十九年）和歌山県観光客動態調査」より）。また外国人の方の宿泊は年々増加しており、〇七年には三万人を超える外国人来訪者が宿泊されています。そのようななか、高野山は〇七年三月に近畿で最初に「森林セラピー基地」として認定を受けました。加えて二〇〇九年（平成二十一年）三月、国際的ガイドブックとして名高い『ミシュラン・グリーンガイド日本編』で国内の代表的観光地・景勝地二百カ所の中で最高評価の三つ星を得た十七カ所の一つとしてランクアップされています。

世界遺産の森林

当地は、世界遺産に指定されている森林セラピー基地であり、日帰りあり、宿泊ありと、時間・体力に応じた八つのロードを

野道を歩く

有し、さまざまなセラピープログラムを有しています。他地域と主に異なる点は、当セラピーのフィールドは世界遺産のバッファゾーンに等しく、なかでも町石道胎蔵界ルート、金剛界ルート、小辺路ルートはそのまま世界遺産のコアゾーンとして指定されています。この森林地域の中でのセラピーは、まさに貴重な体験になることと思います。

木陰

奥の院の大杉林

高野山は千二百年の歴史を持ち、霊験あらたかであるのみでならず、尊厳を護持されてきた森林の持つ自然の「癒やし」を豊富に享受できます。先に述べたように、周囲を森に囲まれた高野山は、町の外に森があるのではなく、森の中に町があり、意図せずどこにいても森林セラピーを受けていることにもなります。特に樹齢三百年以上のスギが数百本も林立する奥の院では、リラックス効果のある有効成分フィトンチッドが多く排出されており、参道を歩くことで身体的にリラックスできます。またその参道の周囲には、一説に二十万基ともいわれる墓所が存在します。墓所には豊臣家や徳川家などの全国の大名家、織田信長、武田信玄、上杉謙信など歴史に登場する有名人の墓所も多く存在し、歴史のロマンを感じることでしょう。近年の歴史ブームで若い女性の方の参詣も増えています。

苔むした仏塔

針葉樹と広葉樹が織りなす錦の森

高野山には多くの寺院関係建築物があり、それを保全していくために高野六木と呼ばれるスギ、ヒノキ、コウヤマキ、アカマツ、ツガ、モミの針葉樹を中心とした木々が森を形成しています。しかしそれだけではなく、季節により趣を変える広葉樹の森も周囲に多く存在します。若葉、新緑、紅葉と、日々その趣を変える森や、コウヤと地名が付く動植物が多く存在する下層植生のなか、ただ歩くだけでも都会の中では得られない充実感と清涼感を体験できますが、インス

トラクターの指導により森の香りを嗅ぎその澄んだ空気をお腹いっぱい吸い込む「森呼吸」、普段触れたことのない樹木の木肌に触れる「木を抱く」などの五感をフル活動させ自然体験プログラムを受けられれば、リラックス効果もより上がることでしょう。

歴史と文化財の宝庫

文化財については別項で詳しく述べられていますが、高野山はその千年を超える歴史の中で、幾度も火災の被害を受けたり、明治期の廃仏毀釈の被害を受けたりし文化財が焼失・散逸したことは残念であると言わざるを得ませんが、それでも高野山には、国宝で二十三件、重要文化財で百八十八件、和歌山県指定文化財で四十件を数え、今後もなお指定品となる可能性のある文化財が数多く伝えられています。これらは「高野山霊宝館」にそのほとんどが収められ、誰もが目にすることができます。まさしく高野山は文化財の宝庫、宗教芸術の殿堂と呼ぶにふさわしいと言えるもので、山の正倉院とも呼ばれています。文化財一つひとつの来歴や、作られた方の思いなどに思いを寄せる時、歴史のロマンだけでなく、有名無名にかかわらず時代の人々のあつい信仰や熱い思いが今も伝わってまいります。インストラクターと歩き、学び、気づくことも頭を使ったセラピーだと言えるでしょう。

精神的癒やし

高野山には自然からもたらされる身体的「癒やし」に加え、精神的癒やし、「こころの癒やし」が豊富に存在します。般若心経の一字一句を写す「写経」を通じ精神集中したり、「阿字観」という瞑想法でもって、忙しい現代社会を離れ雄大な宇宙を感じ、時間を超越しリラックスしたりできます。また現代社会では一部で規律を守ることが失われつつあり問題化していますが、あらゆる命を大切にする、人の物は盗まない、など仏教倫理だけにとどまらない、人として大切な十条の戒めを授かる「受戒」体験は毎日行われており、普段の自分を省みることができ、精神的に癒やされたと大変好評です。金剛峯寺等で行われている説法をお聞きになれば、何か一つ人として大切なもの、心の温まる話をお持ち帰りいただけることと確信いたします。一千年伝えられてきた、年間を通じて行われている法要な

巨木を抱く

森呼吸

どのさまざまな宗教的行事においては、癒やしの音楽ともいわれる聲明（しょうみょう）なども聞くことができます。広い意味で壇上伽藍をはじめ、数多くの文化財や伝統建築を実際に見て触れたりすることで、学び、気づき、新たな自己を獲得することも精神的癒やしと言えるでしょう。

宿坊寺院に泊まって

高野山には、現在では百十七カ寺の寺院があり、宿泊のできる宿坊寺院は五十カ寺を数えます。宿坊によっては「写経」や「阿字観」を体験できますが、特にそういった体験を受けなくても、四季を通じ美しい庭園や庭木、本尊をはじめとする文化財を多く有するお寺という日常と異なる空間に身を置くことで、精神的癒やし・異日常体験ができます。また数軒の宿坊では、仏様の姿を写す「写仏」や数珠を自ら作り上げる「念珠づくり」などの珍しい体験ができ、自分だけのオリジナル念珠を作る楽しみと精神集中、学びを得られます。また厳しい作法はないので、お寺で行われる朝の勤行（ごんぎょう）に参加されますことを是非ともお勧めします。参加されれば、精神的癒やしの効果はより得られるでしょう。別項で詳しく述べられている宗教音楽ともいわれる聲明を普段聞くことができるのも宿坊での勤行における魅力の一つです。勤行の後にはお坊様による法話があり、癒やされるでしょうし、せっかく世界遺産の霊場に泊まったのだからと、ご先祖様や特定の故人様のご供養をされたり、さまざまな祈りを込めご祈願をされたりはいかがでしょうか。宿坊で提供される食事は、高野山の代表的食事である「精進料理」で、動物性タンパク質を一切使わず健康的で、見た目に美しいことも魅力の一つです。

めざめ

豊富な実績

先に述べたごとく高野山には年間約百二十五万人が訪れていますが、夏期の高野山は高地のため平地より約五度から一〇度気温が低く、避暑地として、長く関西方面、特に大阪府下の学校の林間学校を受けてきた実績があり、野生のムササビを身近に観察できるなど、自然体験プログラムを多く有し、宿泊する宿坊も実績豊富です。また高野山大学には、一千人を収めるホールや教室があり、企業の社員研修や各種のセミナーとして利用されている実績も豊富です。

最後に

森林セラピーとは、千年を超える歴史を持つ高野山のさまざまな魅力を紡ぐ横糸のようなものです。何度訪れていただいても新たな「めざめ」を得られる所です。心安らぐ空間と時間、森からもたらされる豊かな心を感じ取り、自分だけの「めざめの森」を体験するために、高野山を訪れてはいかがでしょうか。

（くすのき　はくしゅう）

温泉地の魅力向上のための財源を考える
――入湯税のあり方とは

財団法人日本交通公社　主任研究員
朝倉　はるみ

温泉地―調査結果と実態の乖離

当財団が毎年実施している「旅行者動向」調査によると、日本人の国内旅行先として、温泉は旅行実態・旅行希望いずれも二〇〇〇年の調査開始以来、必ず一位または二位に入っており、安定した人気があります。

しかし、本当に旅行者は温泉地に行っているのか、市町村別入湯客数のデータを見ると、二〇〇八年度の上位三十位のうち二十四市町は前年より減少しており、そのうち十三市町は二年連続して減少となっています。

国土交通省の「観光白書」によれば、国民一人当たりの旅行回数、宿泊数ともに一九九一年をピークに減少傾向が続いており、温泉地でも観光客の減少・伸び悩みが大きな課題となっています。

観光客を誘致するには、イベントのように短期で効果の出る事業と、温泉街の景観修景のように事業完成までに長い時間を要するものの、その効果が長続きする事業があります。温泉地が将来にわたって、つまり未来永劫とは言いませんが長期間観光客を誘致していきたいと考えるのであれば、こうした多様な事業を組み合わせ、それらを継続して実行していかなければなりません。

魅力的な温泉地になるための事業主体とその財源の課題

観光客を誘致し続けられる、魅力的な温泉地になるための事業は、行政と連携しながら観光協会や旅館組合が主体となって展開しており、こうした組織の財源は、会費、行政からの補助金等と、観光客からの徴収に大別できます。しかし、多様な事業を長期間にわたり継続していくための財源としては、いずれも増加が見込めないというのが現状です。

会費については、観光協会や旅館組合の会員である宿泊施設、土産物店等が後継者不足・経営不振で廃業し会員数自体が減少している、あるいは経営不振から、値上げは難しいのが現状です。行政からの補助金等については、地方交付税の減少や人口減少により行政の財政悪化は明らかであり、観光関係の予算だけが今後も安定的に確保される保証はありません。観光客も減少や横ばいという状態では、観光客からの徴収も増加は見込めません。

しかし、これら三つの方法の中でも、観光客は、観光地側の努力によって増やせる可能性があり、観光客から徴収するという方法を見直せば、温泉地の魅力を高めるための安定財源を確保・増額できるかもしれないのです。

観光客から徴収できるものとしては、例えば旅館組合が駐車場を運営してその料金を旅館組合の収入としたり、観光協会で開発した商品の

販売額の何パーセントかを観光協会の収入にするという方法があります。しかし、もっと多くの観光客から幅広く徴収でき、かつ温泉地であればどこでも徴収可能な財源の一つとして、入湯税があります。

そこで、入湯税をもっと温泉地の魅力を高める事業の財源として活用できるのではないか、こうした仮説を検証すべく、当財団では二〇〇八年度に全国各地の五つの温泉地とともに「温泉まちづくり研究会」(注)を立ち上げ、議論を行いました。

入湯税とは

入湯税は、一九五〇年(昭和二十五年)に地方税法七〇一条にて定められた間接税であり、一九五七年から目的税になりました。目的は四つあり、①環境衛生施設、②鉱泉源の保護管理施設、③消防施設その他消防活動に必要な施設の整備、④観光の振興に要する費用、の四つです。鉱泉浴場の経営者(主として宿泊施設)等が市町村から特別徴収義務者に指定され、納税者である入湯客(観光客含む)から税金を徴収しています。入湯税は、宿泊料金等と合わせて徴収されることが多いため、観光客も「税を払っている」という意識が薄いかもしれません。

標準税額は税の設置後数年ごとに改定されていましたが、現在の一人一日当たり百五十円というのは一九七七年に定められた税額で、それ以降の改定は行われていません。

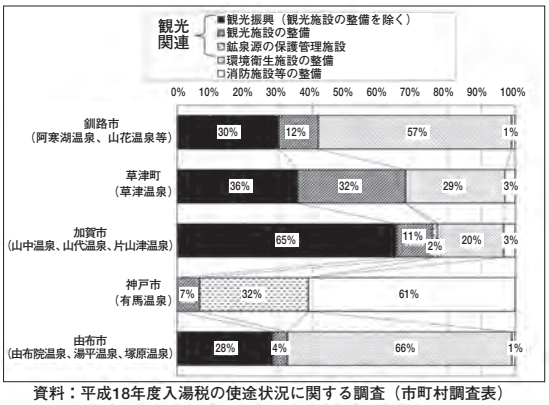
入湯税と観光振興

では、観光客から徴収された入湯税はどのように使われているのか、温泉まちづくり研究会の会員温泉地のある市町のデータを比較してみました(図1)。前述したように入湯税の使途は法律で定められていますが、市町村によってその比率は大きく異なっています。そして、「観光の振興に要する費用」という目的の一部が、観光協会等の地元組織へ、補助金や受託事業費として還元されています(図2)。

税金は納税者に還元するのが原則であれば、入湯税はそれを徴収した場所、つまり温泉地で、納税者である観光客のために使うというのが税本来のあり方と考えることができます。もし、観光協会や旅館組合に入湯税が全額還元されれば、それらの組織の財源は拡大し、観光客のために温泉地の魅力を高める事業も充実させることができます。

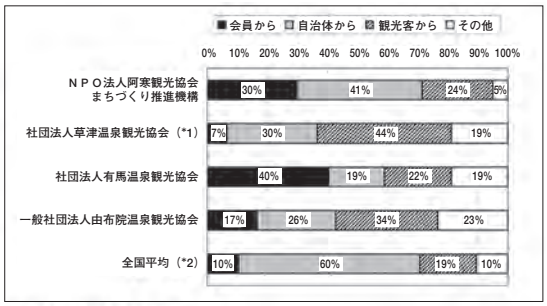
したがって、まずは温泉地の観光協会や旅館組合は、入湯税の使途(配分比率)の現状を把握し、それを納税者である観光客にも明らかにした上で(目的税である入湯税の使途の透明化)、行政に対し配分比率変更の要請をしていくこと

図1　入湯税の使途比率<2006年度>



資料:平成18年度入湯税の使途状況に関する調査(市町村調査表)

図2　温泉地の観光協会(観光まちづくり組織)の財源比率<2008年度収入決算>



*1:公益事業と収益事業の合計
*2:2006年度に(財)日本交通公社が全国地方自治体対象に実施した「観光関連組織に関するアンケート調査」より

が必要となります。

行政も財政が苦しい上、入湯税を一般財源化しているところが多く、現状の入湯税配分比率の変更には消極的であることが想像されます。しかし、入湯税は納税者である観光客に役立つよう使われるべきものである以上、観光協会や旅館組合ばかりでなく、観光関係者が一体となって、行政に入湯税の使途見直しを働きかけることには大きな意義があります。

入湯税の配分比率については、三重県鳥羽市の取り組みが参考になります。同市では、約二十年前から温泉開発が行われていました。しかし、民間宿泊施設主導での開発であること、源泉を持たず「運び湯」である施設もあること、他の温泉地では入湯税が一般財源化されているケースが多いことなどを理由に、市と民間で入湯税の徴収とその使途について協議を続けてきました。その結果、目的税である入湯税の使途比率について合意に至ったため、条例を制定して二〇〇七年度から入湯税百五十円の徴収を開始しました。入湯税の使途比率は、「鳥羽市鉱泉源保護管理整備補助金交付規定」に、観光振興に五〇％、鉱泉源保護に三〇％、消防施策等に一〇％、環境衛生施設に一〇％と定められており、鉱泉源保護以外の七〇％が「鳥羽市観光振興基金」として積み立てられています。

入湯税見直しのもう一つの方向性

入湯税の一部は観光振興の財源として既に活用されていますが、観光振興の事業の増加や継続のためにさらに大きな財源が必要になった場合、その税額を引き上げるという方法もあります。入湯税は市町村税なので、税額や減免措置等は各自治体の判断で決められるからです。宿泊料金や入浴スタイル（宿泊、日帰り別）によって、百五十円以外の税額を徴収している市町村もあります（静岡県下田市、山形県鶴岡市、三重県桑名市等）。

観光振興の財源確保のため新税を導入するという方法もありますが、新税導入は納税者の反発も大きく、容易でないことが予想されます。例えば、消費税導入の際も商業業界団体やマスコミが大きな抵抗を示しました。

温泉地では、目的税である入湯税がすでに徴収されているため、新税の創設ではなく、現在の入湯税に「上乗せ」する形で税額を増額するほうが、観光客の反発は少ないと考えられます。消費税が五％に引き上げられた際も、導入時に比べればほとんど反発はありませんでした。また、日本初の法定外目的税である山梨県富士河口湖町の遊漁税（釣り客から一人一日二百円徴収）は、遊漁料に上乗せする形で徴収されています。

しかし、「上乗せ」した分がこれまでと同じように一般財源化されては意味がありません。つまり、「上乗せ」分は一般財源とは区分し、基金を設置したり特別会計として、確実に観光振興に還元されるよう、あらかじめ取り決めておかなくてはなりません（前述した三重県鳥羽市の例参照）。

兵庫県有馬温泉の旅館共同組合では、入湯税の上乗せに類似した方法での独自財源確保について議論を始めています。入湯税を上げるのではなく、「入湯料（仮称）」として宿泊客から入湯税と一緒に五十円を預かり、「温泉みらい・創成基金」として積み立て、環境保全に配慮した温泉地の基盤整備に活用しようとしています。現在、旅館組合では徴収目的や使途等を観光客に周知するための「マニフェスト」の作成や、旅行業者、税務署、行政といった関係各所との調整を進めており、二〇一〇年のできるだけ早い時期の徴収開始を想定しています。

温泉地の将来像の表明

温泉地の観光協会や旅館組合が、入湯税の使途比率の変更や上乗せによって温泉地の魅力向

上事業の財源を増やしたいと考える場合、行政や観光客に対し、「増えた分を何に使うのか」という点を分かりやすく説明しなければなりません。「観光協会の財源が少ないから入湯税を上げてそれを充当したい」という論理では、納税者となる観光客も徴収者である行政も、納得しないのは明白です。ですから、観光協会や旅館組合は、観光地の魅力向上のための長期事業計画を策定し、そこで提案された事業を確実に実現していくために財源が必要である、ということを観光客や行政に納得してもらわなければなりません。それが、入湯税の配分比率の変更や上乗せを実現する前提として不可欠なのです。

富士河口湖町は、釣り客の増加に伴う環境悪化を背景に、長期にわたる環境保全・環境美化の必要性から課税目的をトイレや駐車場、道路等の施設整備に限定せず、湖畔清掃等、周辺地域における環境の保全・美化まで含めています。**写真**は、遊漁税で整備された駐車場です。ちなみに、二〇〇八年度は、徴収人数は五万五千三百三十四人、徴税額は千百七万円でした。

遊漁税で整備された駐車場（資料提供：富士河口湖町）

北海道阿寒湖温泉では、二〇一〇年を目標年とする十年間の長期計画「阿寒湖温泉活性化基本計画」を二〇〇二年度末に策定し（**図3**）、その計画実現のための財源の一つとして新たな地方税のあり方を研究し、納税者への還元方法として、温泉街で使える地域通貨の発行もアイデアとして出されました。

有馬温泉旅館共同組合では、前述した基金で温泉の有効活用のための「泉源」の見直しや公衆トイレの整備等、「観光客の目に見える事業」を想定しています。

観光客が納得する入湯税に向けて

税金の徴収者は、納税者に対して「税金をどのように使ったか」という結果報告をする義務があります。納税者が納得する使い方であれば、その後も徴収を続けることに納税者の不満は出ないでしょう。入湯税については、納税者である観光客にこうした結果報告がなされているでしょうか？

観光協会や旅館組合が、観光振興のための目的税である入湯税がどのように使われているのかきちんと監督し、それを観光客に報告していくこと、そして観光客が満足する使い方を行政に提案していくことが、入湯税を観光地の魅力向上のための財源としてより良く活用していくための第一歩となるのです。

（あさくら　はるみ）

（注）温泉まちづくり研究会は、入湯税以外の温泉地の共通課題についても議論・提言を行っています。概要は、ホームページをご覧ください。http://www.jtb.or.jp/investigation/index.php?content_id=149

図3　阿寒湖温泉の商店街整備イメージ図

資料：「阿寒湖温泉活性化基本計画第 2期計画」に基づいて策定された「商店街整備構想」より

連載Ⅰ
あの町この町
第35回

差金が右腕——岐阜県飛騨市古川

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

坂口安吾はひところ「ヒダの国」に熱中していた。安吾によると日本の古代史にとって「重大きわまる土地」であって、ヤマト王朝と並びヒダ王朝があったのだが、歴史から抹殺された。

『安吾新日本地理』のなかで、くわしく論じている。それによるとヒダ王朝は蒙古系のボヘミアンであって、つねに高原に居をかまえ、馬に乗って移動した。乗鞍岳と穂高とのあいだの安房峠や、乗鞍と御岳山のあいだの野麦峠を、疾風のように通り抜けた。王国の首長は白馬に乗っており、それがいまも皇室に先例として伝わっている……。

日本の古代史をめぐっていろいろ大胆な仮説があるが、なかでも安吾のヒダ王朝説はピカ一で、伝説というよりも夢物語じみている。いや、夢物語そのものといっていいようなものだが、しかし、実際に飛騨にやってくると夢ではなくなってくる。目に見えない風の王が峯づたいに駆け抜けてくるような気がするのだ。

少なくとも地理的にみて、遠い昔、ここに独立王国があったと考えても不思議はない。飛行機の窓から見下ろすと、きっとひと目でわかるだろう。西に白山、北に飛騨高地、東に槍・穂高のアルプス連山、南には巨大な御岳の山塊。ややタテ長の円を描いて、飛騨の地は砦のような山々に守られている。

当然のことながら坂口安吾のいう安房峠や野麦峠だけでなく、東西南北に峠があって、外との細い通路をつくっていた。西の天生峠は白川郷をへて加賀へ通じる道。南の松ノ木峠は美濃、北の大多和峠は越中道。そして安房峠と野麦峠が信州と結んでいた。いずれも一〇〇〇メートルをこえる険しい峠であって、安房峠となると一七九〇メートル。冬には背にあまる雪がつもる。冬の峠越えには土地の猟師も道に迷いかねないので、立木に山刀で目じるしの切りきずをつけて通ったという。

とするとかつては一年の半分ちかく、飛騨一帯は外との道が閉ざされていた。独立王朝を築くのに絶好の土地というものだ——。

飛騨古川のキャッチフレーズは「やわらかい、あたたかい、なつかしい」。たしかに町を歩いていると、何やらしきりになつかしい。幼いころ、お寺の境内で遊んでいた気分である。観光ポスターでおなじみのコイの泳ぐ水路と白壁の土蔵にしても、ひところまでは、どの町や村でも見かけた風景である。いま、ある世代以上の人は、白壁

に落書きして叱られたり、ゴム草履で水路に入り、フナやドジョウを手づかみにした思い出があるのではなかろうか。

水路は瀬戸川といって、江戸の初めに町の用水路としてつくられた。これをはさんで北が武家町、南が町人町、エリアを分ける役割もあったようだ。すぐわきの寺の山門がおもしろいので、ためつすがめつながめていると、小学生の集団がゾロゾロとやってきた。正面の階段に並んですわり、まずは和尚さんのおはなし。

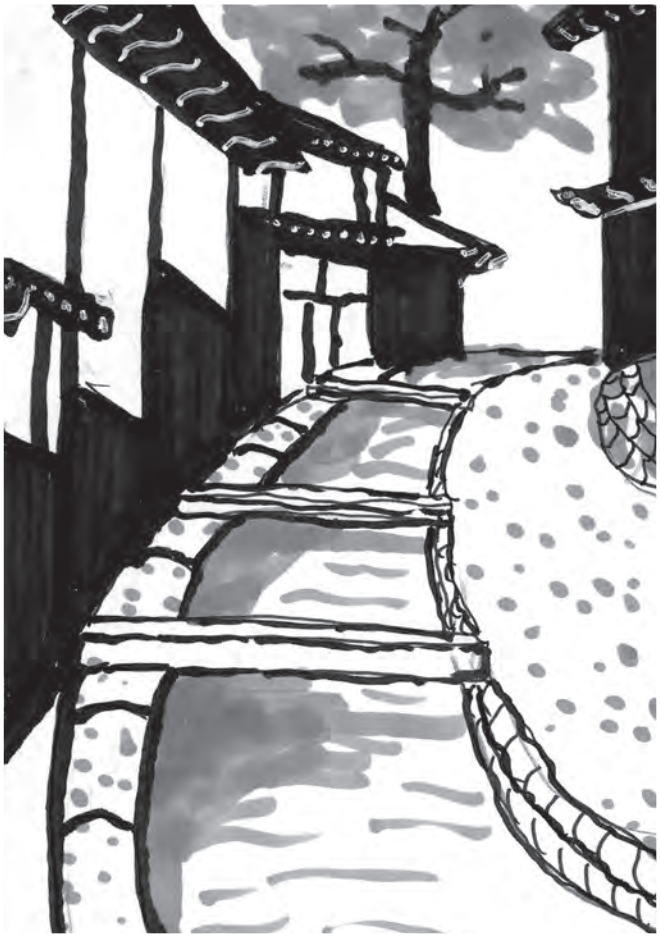
「当寺は室町時代の様式をのこす代表的な寺でありまして――」

小学生にはムリではないかと思う語り方だが、まあ子供にとっては「和尚さんのおはなしをきいた」という事実が大切なのであって、中味は二の次というもの。つき添いの先生や父兄も、べつにこだわりなく耳を傾けている。

円光寺といって、人のいいならわすには「焼けずに残りし円光寺」。明治三十七年（一九〇四年）、古川に大火があって市街地の多くが燃上したが、円光寺は奇蹟的に焼けなかった。「水呼びの亀」がいるせいだという。本堂の「妻」にあたるところに亀が刻んである。建物を仕上げて、さて何で飾ったものか棟梁が思案していると、旅の老人が亀を彫れ、火除けになるとアドヴァイスした。

室町時代の様式よりも「水呼びの亀」伝説のほうが小学生はよろこぶと思うのだが、和尚さんはあいかわらず難しいはなしをなさっている。きっとあやしげな言い伝えより、たしかな歴史が大切とお考えのマジメな人柄なのだ。

「旅の老人」というところがおもしろい。当地は「飛騨の匠（たくみ）」の里であって、腕に覚えのある工匠がわんさといた。彫り物名人左（ひだり）甚五郎は、実はヒダの甚五郎であって、飛騨の工匠たちの総称だとする説がある。代々受け継いできた技術を元手に各地で寺社づくりに活躍した。古代の都奈良にしても、飛騨の工人なくしては法隆寺も東大寺もつくれなかった。安吾がナラ王朝と並び立つヒダ王朝を空想したのも、大いなるハイテク技量の集団を考えてのことにちがいない。



コイのいる瀬戸川

そんな名人クラスが旅から帰ってきて、また旅に出るつかのま、寺の建築現場で棟梁の相談にのったのではあるまいか。

「亀ならおれが彫ってやろう」

そんなふうに話がまとまったのかもしれない――。

勝手な空想をしながらブラブラ歩き。町歩きのもっとも楽しい時間である。そんなときには、ことさら探さなくても願いどおりのところに行きつくもので、水路が九〇度曲がったすぐ先で「飛驒の匠文化館」の前に出た。

「大和朝廷の時代、傑出した技法で寺院仏閣の造営に活躍し、全国にその名を知られた〈飛驒匠（たくみ）〉――」

高らかにうたってある。ついいましがた寺の亀のつながりから、それとなく考えていたとおりなので、なんともヘンテコな気分である。大工言葉では「雲」というそうだが、屋根や軒を支える肘木に彫りこんだ紋様のこと。柱の一つに雲のサンプルが無数にとりつけてあって壮観だ。「とびぐち型」「きんとんうん型」……。はじめて知ったが、雲に少しずつデザインのちがいがあって、大工の署名がわりになる。雲の型を見れば、誰が――あるいは誰の系統が――それを建てたか、ひと目でわかる。

「建築部材を組み合わせる工法を『継手（つぎて）』『仕口（しぐち）』といいます」

継手は長さの方向に継いだもので、仕口とは二本以上を一定の角度で接合させたものをいう。

フムフムとうなずきながらながめていった。差金（さしがね）、墨壺をはじめとして、さまざまな道具が並んでいる。差金を右腕のように使いこなして、はじめて一丁前というもの。

私自身、いたって不器用で、幼いころから工作類に苦しんできた。ノコギリで切ると、きっと斜めにそれていく。金づちで打つと釘が倒れたり、へんなふう

木組みの家

に打ちこんだり。おさえている指をたたいて、涙を流したこともある。

そんな目でみると、千鳥格子や「四方鎌継」とよばれる細工が人間ワザとは思えない。継手、仕口を組み合わせ、釘一本使わずに大きな建物をつくることができる。抜けたり錆びたりゆるんだりする釘とちがって、きっちり組み合わさると、法隆寺の例にみるとおり、千年の歳月にもビクともしない。

それにしても、どうして飛騨が匠の里になったのだろう？「匠の業績と足跡」「匠の技と術」「匠の道具」。順に見ていったが、初まりについては「木の国飛騨に生まれた」のひとことで片づけてある。「木の国」とよばれる山間の町は全国にごまんとある。なぜ、飛騨がその代名詞になるまでになったのか？

名人上手といえども飛騨の工匠たちは名前をのこしていない。寺院仏閣を仕上げると、道具をまとめて風のように立ち去った。近代の芸術家のように、ものものしくサインを入れたりしなかった。

そのなかでひとりだけ「止利仏師（とりぶっし）」の名が伝わっている。「くらつくりのとり（鞍作止利）」ともいって、生没年不詳、百済系の渡来人の孫で、法隆寺金堂の釈迦三尊の作者とされている。たしか中学の美術の時間に習ったと思うが、「とり」という奇妙な名前が印象にのこった。止利、また鳥とも書いた。

その止利仏師も飛騨の匠の一人だったらしいのだ。伝承の一つによると、古川の西どなりの旧河合村（現・飛騨市河合）に月ヶ瀬という字（あざ）があるが、そこの生まれとなっている。月ヶ瀬のとなりが明ヶ瀬（みょうがせ）。いかにも古代にさかのぼるような風雅な地名ではなかろうか。

古川はあざやかな町づくりをつづけている。飛騨古川建築組合連合会のモットーが「家づくりに活かされる匠の技術」。それと町並みの再生と組み合わせた。

軒の肘木の「雲」、あるいは蟇股（かえるまた）、千鳥格子は、もともと寺院仏閣の様式だが、それを町家や民家でも新築、建て替え、補修にあたって採用してもらう。三〇〇人をこえる町の優れた技術者の仕事の場となるとともに、風格のある家が一つ、また一つとできていった。

明治三十七年の大火のあと、重厚な耐火様式による白壁と土蔵の町ができた。それが高度成長期にぽつぽつ取り壊されて、コンクリート造り、新建材式やハデハデスタイルがまじりこんで、全国どこにでもある雑然とした町になりかけた。そんななかで町衆がやしなってきた伝統技術を思い出した。現代の匠たちを生かして、木造りの統一感のある町並みをつくっていく。

写真屋、クリーニング屋、珈琲店、和菓子店、靴屋、アイスクリームの店……。暮らしの場が同時に伝統工法の家である。それがいいぐあいに古い家々と調和して、「やわらかい、あたたかい、なつかしい」町並みを実現した。はじめに「幼いころ、お寺の境内で遊んでいた気分」を思ったのは、あながちまちがってもいなかった。右、左につぎつぎと、寺の屋根や軒と同じ木組みや彫り物や紋様が目にとまる。木の香りが匂い立つような継手と仕口が白で塗り分けてあって、ほれぼれするほど美しい。べつにナンノナニガシのお屋敷ではなく、ごくふつうの町家であって、回覧板をもってきた人が戸口で立ち話をしているのだ。

川っぺりに出ると、いちどに前方がひらけた。神通川の支流の宮川に荒城川が注ぎこむ三角地点に町がひらけ、合流点の小三角形を本光寺の雄壮な本堂が重しのように押さえている。通称「御堂のでっかい本光寺」。「焼けずに残りし円光寺」とちがって、こちらは大火で焼けたので明治末年に再建。各

地にちっていた棟梁たちがおっとり刀で馳せ参じ、飛騨一の木造建築をつくり上げた。

「三寺（さんでら）まいり」といって、古川には三〇〇年以上もつづく寺参りの習わしがある。一月十五日の夜に、本光寺、円光寺、荒城川の橋づめの真宗寺を、昔ながらのろうそくを手にして廻っていく。宗教的な行事であると同時に、冬のたのしい火と闇のおまつりだ。厳しい寒さ、夜の闇、チロチロ燃える明かり――ぴったり条件がそろっている。若い男女が知り合ったり、仲を深めたりして当然のこと。信州の製糸工場が盛んだったころ、女工さんたちが休みをとり、野麦峠をこえて三寺まいりにやって来たというが、若い女性の本能で、ロマンチックなたのしみをよく知っていた。

毎年四月に行われる飛騨古川まつりでは、華麗な屋台が曳き出され、夜は勇壮な起こし太鼓とともに裸の男たちがぶつかり合う。これが男のまつりとすると、三寺まいりは女の祭礼というものだ。

本光寺から少し先の角をまがると、ろうそく屋の看板が目にとまった。絵ろうそくといって、白と紅色の二本セット、まん中の金の地色に梅や桜の花がちりばめてある。手づくりの燭台つき。

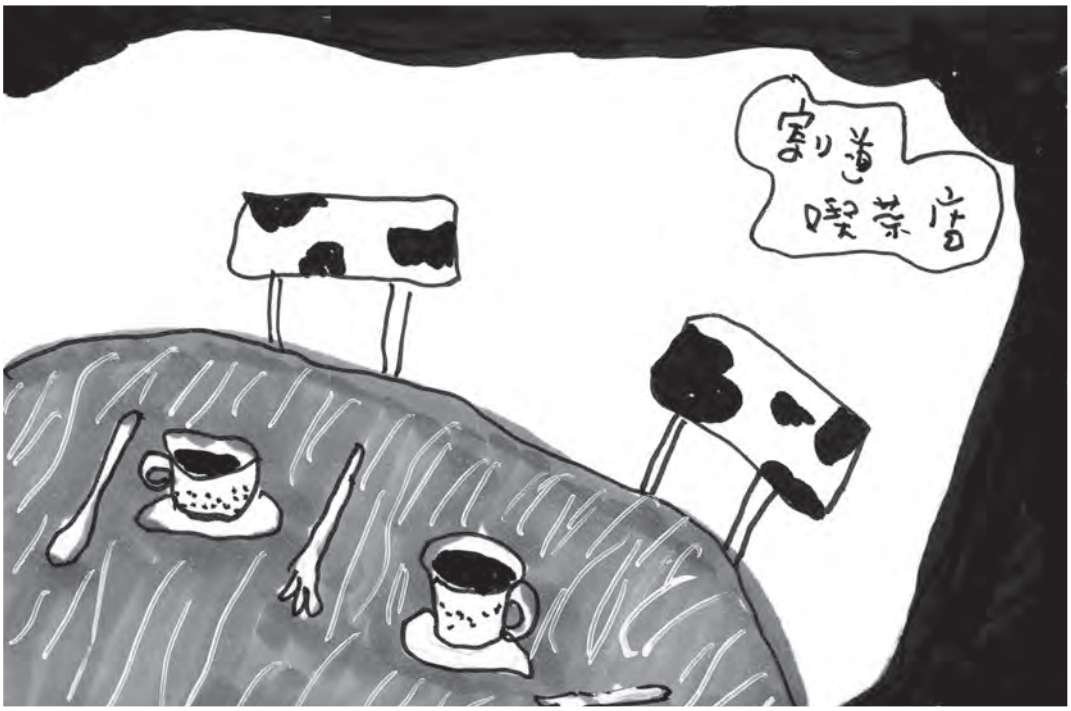
「生掛和蝋燭」の看板は、さてどう読むのか？ 思案顔でつっ立っていると、買物袋のおばさんがつかつかと寄ってきた。

「き・か・けと読みます」

幼い子に教えるようにゆっくりと、「きーかーけー」と声を出した。こちらが「きかけわろうそく」と復唱すると、ニッコリとうなずいた。和ろうそくは一本、二本といわず、一丁、二丁とかぞえるのだそうだ。

「おとうふとおなしですネ」

ナルホドと思って大きくうなずくと、安心したようにまたニコッとした。体のわりに大きなお顔で、全



寄り道したくなった喫茶店

絵ローソク

体が福々しい感じ。東京などではまずにお目にかかれない。古川の和ろうそく屋は当主が七代目というが、そういう店をもった土地が代をかさねるなかでやしなった顔にちがいない。

そういえば「ヒダ王朝」探索後、坂口安吾はヒダ人の特徴をつかんだと称して述べている。

「まさしく、そうである。仁王様がヒダの顔なのだ」

山門に立って大きな目玉をギョロつかせている見張り役だ。コブコブの体躯とマッチした豪快な風貌である。飛騨の工匠たちは仁王様をつくるとき、ありもしない顔をこしらえたりしなかった。見なれている仲間をモデルにして、それに少々のスゴ味を加えた。それがやがて全国の仁王様の顔になった。

買物袋のおばさんが米屋の店先で話している。前垂れをつけたご主人は多少はギョロ目だが、顔はツルツルしたほとけ顔だ。しかし、もともとはコブコブだったのが、平成の風に吹かれているうちにコブが埋まってツルツルになったのかもしれないだろう。

壱之町、弐之町、三之町と、古川には昔ながらの町名が生きている。

「おんたけのりくら笠ヶ岳……」

ひと休みしたお店に四方の山々を染めつけた手拭いが下がっていて、そこに山名とも唄ともつかぬ言葉がついていた。おんたけ、のりくら、笠に槍、西にまわって白山とくると、さながら豪勢な大名行列である。どんな殿様だってかないっこない。

ヒンヤリした風が夕刻の壱之町を吹き抜けた。冬の先触れ。やがて風の王がもどってくる。「おんたけのりくら笠ヶ岳」の家来をひきつれ、白い峯づたいに峠をこえて、匠の里にもどってくる。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
風土燦々⑧

町住みのリアル・ハンター（前編）
――静岡県浜松市天竜区

ルポライター　飯田　辰彦

静岡県には県域の東から西にかけて、幾筋もの大河が北の山地から南流している。そのうち最も西側を流れるのが、長野県の諏訪湖を源とする天竜川だ。新幹線などでこれを渡る時、少ない水量や水の濁りなどから判断して、私は「まずこの川には魚は棲めないだろうな」と高をくくっていた。

二年前、浜松市天竜区二俣町の川漁師、片桐邦雄さんと出会って、この先入観はものの見事に崩れ去った。片桐さんは二俣町の天竜川左岸に近い場所で割烹料理店を営む実業家でもある。さらに驚くことに、天竜川の川漁のみならず、春から夏にかけてのニホンミツバチの養蜂、冬期の狩猟（イノシシ、シカ、カモ等）までも一人でこなすスーパー狩人なのである。もちろん、こうした漁（猟）での捕獲物はすべて、客の注文に応じて自家の店のテーブルに並ぶ。

二俣は旧天竜市の市役所があった町で、戦国時代に今川氏の臣、二俣昌長が二俣城を築いたことで、歴史の表舞台に登場してくる。天竜川に臨む戦略要地であったため、やがてこの城をめぐって武田と徳川が攻防を繰り返した。また、天竜川の舟運が盛んであった時代には、鹿島、船明などの河港が栄え、木材の集散・加工地としてにぎわった。

今、そうした殷賑は遠い記憶となってしまったが、寂れた街角のそこここにいまだ繁栄の名残をとどめている。そんな町の一角に、片桐さんの店「竹染」はある。

春五月、ニホンミツバチの分蜂が最盛期に入るころ、天竜川ではシーズン幕開けを告げる捨て針漁が始まる。これは海の漁で言えば延縄で、基本的にはウナギを狙う。一ヶ統につき十本の針が付いた仕掛けを計十五ヶ統、川に沈める。針にはそれぞれアユの切り身（贅沢？）が餌として付けられ、一ヶ統ずつ川の流れに直角に据えられる。水流に押し流されないよう、仕掛けの両端には重しがセットされ、捨て針を沈めた場所が分かるよう、目印のウキも付ける。

捨て針は午後二時から夕方にかけての時間帯に仕掛け、夜九時を回ったころ引き揚げる。漁場は天竜浜名湖線の鉄橋と浜北大橋に挟まれた流域一帯で、比較的水深のあるポイントを選んで仕掛けを投入する。

「ウナギは夜行性で、夜、寝床から餌場に向かう〝ウナギ道〟に沿って仕掛けます。針はただ沈めればいいというわけではなく、川底でかすかに動いていないと、ウナギは興味を示してくれません」

捨て針が始まって二週間ばかりたったある日、漁に同行した。自作の川舟の操船を片桐さんが担当し、漁のほぼすべてを受け持つのは長男の尚矢さんだ。針の引き揚げの前、せいぜい獲れても二～三匹だろうと

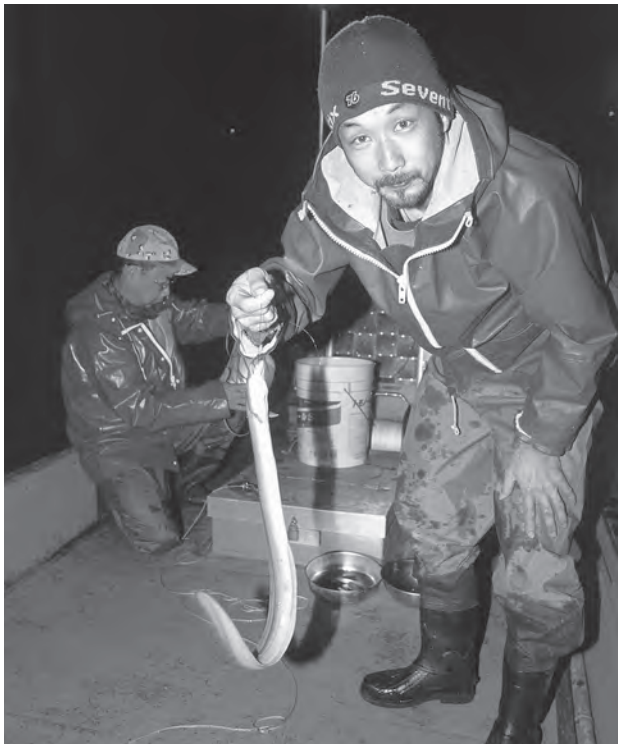
予想していたのだが、あに図らんや、一ヶ統につき二匹ぐらいのペースで獲物が揚がってくる。結果としてウナギ十三匹、ナマズ九匹、スッポン一匹、ほかにニゴイ一匹、ギギ二匹が獲れた。ウナギの中には二キロを超えるものもまじっており、意外な天竜川の豊かさに驚いた。

しかし、川の流れとともに生きてきた専業漁（猟）師の片桐さんに言わせると、現実はそんなに甘いものではないらしい。

「たくさんのダムができる前、天竜川の水は飲用を含む生活用水として使われていました。拡大造林が川の荒廃に拍車をかけ、魚の数は以前の千分の一、一万分の一に激減してしまっています」

魚の量（漁獲）よりも一層深刻なのが、質の問題だという。

「ニゴイ、ギギ、ハスなどは、もともと天竜川にはいなかった魚です。これらは琵琶湖の固有種で、アユの稚魚（放流用）とともにそうした固有種の魚卵が全国の川に運ばれ、拡散してしまいました。生態系に深刻な影響を与えているという意味では、むしろ外来魚のブラックバスやブルーギル以上ではないでしょうか」


捨て針にかかった２キロに近いウナギ。手に持つのは長男の尚矢さん

琵琶湖固有種散布の話は、私自身、東北から九州にかけてのあらゆる土地で耳にしてきた。片桐さんは「今さら嘆いても仕方ありませんが、こんなに棲みにくい川でも、季節になればそれぞれの魚が遡上を始める。けなげなものです」と、それでも前向きにとらえている。漁をすること自体が伝統文化の保存につながると考えられる人だからこそ、一人になっても天竜川に寄り添うことをやめないのだ。

漁から家に戻ったところで（深夜）、もったいなくも獲物の試食に及んだ。ウナギは白焼きにしてワサビじょうゆで、ナマズは氷水で三度も脂を落として洗いに、そして最後はもちろん竹染の看板である〝ウナ重〟を賞味する。ウナ重のタレには、夏、自らの巣箱から搾るニホンミツバチの蜂蜜が隠し味として使われていて、独特のコクが加わっている。

養殖ものとの味の違いを今さら書き立てても、嫌味になるだけであろう。川の現状を聞いた後では、背筋を伸ばして正座で食べないと罰（ばち）が当たりそうな気がしてならなかった。捨て針に続いて、六月開禁のアユ、スジエビ、イサザと、秋が深まる十一月の半ばまで、片桐さんは天竜川の恵みに支えられて漁に精を出す。「遊びで殺生はしない」というひと言に、最後の専業漁師の矜持が強烈ににじみ出ていた。

（いいだ　たつひこ）

連載Ⅲ
ホスピタリティーの
手触り56

エアラインの使命

旅行作家
山口 由美

国と国とを結ぶ翼の理由とは

私がパプアニューギニアという国にシンパシーを感じて通い続けている理由のひとつは、フラッグキャリアであるニューギニア航空の日本支社長、Sさんの熱意なのかもしれないと思うことがある。

毎週土曜日、ニューギニア航空の成田空港支店は、週一便の運航に合わせて店開きする。事務所の鍵を開け、先頭に立って空港を走り回るのは、大抵が支社長自らである。飛行機とは「飛んでくる」ものではなく、陸上の人々が支えて「飛ばす」ものなのだということを、私は、いつもその後ろ姿に実感させられる。

観光客も慰霊団も大統領も、そして、日本に輸入されるマグロも、旅行博でパフォーマンスをするダンスチームも、みんなこの直行便で行き来する。成田を飛び立てば、首都のポートモレスビーまでは六時間二十五分。秘境のイメージが先行するパプアニューギニアだが、実は、ハワイに行くのと変わらない近さなのだ。しかし、もし直行便がなかったら、周辺国を経由して長い旅となる。この路線のおかげで、パプアニューギニアと日本とのパイプは存在すると言っていい。

そこには、今や忘れ去られた感のある、エアラインとは国と国を結ぶ翼であるという、熱き使命がある。

空港の駐機料の高さ、日本人の海外渡航者数の減少、それとは裏腹の中国などの海外渡航者数の増加、それらが相まって、日本の空港は、極東の空の玄関口の座をソウルや香港などに明け渡しつつある。それは、同時に、日本と諸外国を結ぶ翼が失われつつあることを意味している。

例えば今年三月、一部の関係者が涙ながらに見送ったラストフライトがあった。フィジーのフラッグキャリア、エア・パシフィック航空の日本撤退である。

一九八八年の就航以来、二十年余りの歴史を刻んできた成田路線。代わりに就航することになったのは香港である。かつては日本航空が運航していたこともあるフィジーだが、今では、香港やソウルなどを経由しないと行けなくなってしまった。

それはまた、フィジー以遠の南太平洋諸国とのつながりが断ち切られたことを意味してもいる。トンガ、バヌアツ、さらには地球温暖化でやがて国が消滅するといわれているツバル。フィジーは、これらの国々への玄関口でもあったのだ。

ニューギニア航空もかつて一度、日本支

社撤退の憂き目を経験している。そのまま、ニューギニアのことなんか忘れてしまう人生もあっただろうに、Sさんは、支店が再開した時、転職先の航空会社の部下も引き連れて古巣に戻り、日本支社長となった。以来、不定期のチャーター便から再開して現在に至っている。

エア・パシフィックが撤退した今、ニューギニア航空は、フィジーと結ぶルートのひとつでもある。ニューギニア航空は、日本との関係が遠くなりつつある南太平洋諸国との架け橋でもあるのだ。

成田に飛ぶ準備をするニューギニア航空機。ポートモレスビー、ジャクソン国際空港にて

ところで、エアラインといえば、山崎豊子の小説『沈まぬ太陽』の映画が公開される。日本のナショナルフラッグキャリアとしては好ましくない話題だろうが、主人公のモデルになった小倉寛太郎氏は、エアラインというものの使命を全うした、人望のある人物だったと聞く。

物語の冒頭、主人公がケニアのサバンナで猛獣狩りをするシーンがある。いわば懲罰人事によって派遣されたナイロビは、日本航空の路線のない、オフラインの支店であった。小説では、自らの運命のやるせなさのはけ口として猛獣狩りに興じる主人公の姿が描かれる。アフリカ駐在が悲劇の象徴にとらえられているのが、アフリカにもシンパシーを感じる私にはいささか違和感があったのだが、実際の小倉氏は、アフリカ好きの親睦団体である「サバンナクラブ」の創始者として知られている。引退後は、動物写真家として、東アフリカの魅力を伝える仕事に力を注いだ。理由はどうあれ、赴任先となった土地を理解し、深く愛し、日本との架け橋となったのである。

そこに実際の翼があったかどうかにかかわらず、国と国の架け橋になったことにおいて、まさにエアラインの使命を実現した人生だったのではないだろうか。

来年三月、成田空港の新滑走路が開業する。そのタイミングで、ニューギニア航空念願の週二便がいよいよ実現の見通しという。

近年、資源バブルに沸くパプアニューギニアでは、中国資本の参入が著しい。近隣諸国がそうであるように経済的には中国との結びつきが強まっており、極東の玄関口として中国を望む声も多いという。

そのなかで日本路線を守り、さらに強化するに至った背景には、一筋縄ではない熱意があったに違いない。Sさんはいつも口癖のように言う。商売だけで飛ばしているんじゃない、エアラインは国と国を結ぶものなんだ、だから飛ばしているんだと。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

百年以上の歴史を持つ軽井沢・星野リゾートの四代目社長である星野佳路の名前は、日本の代表的な避暑地にある老舗企業の経営者としてよりも、むしろ、日本各地にある破綻リゾートの運営を旧経営陣から引き継ぎ、次々とよみがえらせることに成功している〝再生カリスマ〟として知られているかもしれない。

星野は、一九六〇年に長野県軽井沢町で生まれ、慶應義塾大学経済学部を卒業後、米国コーネル大学ホテル経営大学院修士課程を修了し、一九九一年に星野リゾート社長に就任した。古参社員の反発を受けながらも大胆な経営改革を断行し、自社ビジネスの再構築に成功した。その経験を生かして、破綻したホテルや旅館の再生を引き受けるようになり、短期間のうちに黒字転換を実現してきた見事な手腕は、新聞や雑誌、テレビなど多くのマスメディアで繰り返し取り上げられている。本書**『星野リゾートの事件簿～なぜ、お客様はもう一度来てくれたのか?』(中沢康彦著、日経BP社)**は、経営情報誌『日経ベンチャー』に今年三月まで一年間にわたって連載された「星野リゾートの事件簿」に加筆したものだ。星野リゾートが再生を手掛けてきた全国各地の事例から、十カ所のリゾートやホテル、旅館、レストラン、地ビール会社の現場で、それぞれのスタッフがどのように考え、行動し、立て直しに成功したかを丹念に取材することで、〝再建カリスマ〟＝星野佳路の真髄に迫り、その信念と実行力を見事に描き出している。

北海道占冠村のアルファリゾート・トマムでは、ゴンドラのメンテナンス作業を行う索道部門のスタッフが、通年リゾート化を目指して「夏の顧客満足度(CS)」をテーマに掲げた星野の問いかけに、ゴンドラの山頂駅付近で雲海を見ながらコーヒーを楽しんでもらう早朝営業のカフェというプランを提案する。作業スタッフは、CSの向上を図るため一年をかけてお客様へのあいさつと笑顔を心掛け、「お客様が喜ぶ姿」を前提に物事を考える姿勢を身に着けた結果、眼下に広がる雲海という「見慣れたいつもの風景」をお客様にも見せたいという発想に結びつけたのだ。

新人教育のOJT(職場内訓練)で福島県磐梯町のアルツ磐梯へ赴任した新入社員が、先輩社員たちのCSに対する姿勢に疑問を感じ、逡巡しつつも、顧客無視がまかり通る状況を質すメールを社内のメーリングリストで流すエピソードも、「自由に発言する星野リゾートの文化」を反映する出来事として興味深い。新入社員によるメールを契機に、アルツ磐梯では、顧客を見据えたサービスのあり方をめぐるメールが交わされるようになり、星野リゾートによる再生が始まってから二年が経過しながらも意識改革の途上でサービス体制が十分ではなかった社内の空気が、一転して良い方向へと変わっていく。

巻末で自ら「事件が会社を強くする」というタイトルの解説を書いた星野は、「細心の注意を払っても、お客様からクレームをお受けしたり、トラブルが起きたりすることがある。ときにはスタッフ同士の人間関係がうまく行かなくなり、社内で対立や行き違いが起きることもある」と認めている。その上で星野は、こうした〝事件〟をその場限りにせず、「事件を通して、しっかりと考え抜くことで、新しい発想が生まれ、スタッフが成長する。つまり、事件こそが新しいサクセスストーリーを生むのである」と強調する。

本書で取り上げられている事件は、すべてが実際に星野リゾートの現場で起きた出来事であり、サクセスストーリーの誕生秘話とも言えるものだ。

(挑全)

B6判　224ページ
定価　1,500円
日経BP社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■旅行者動向２００９ 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。〇九年八月発行。

■Market Insight 2009
（日本人海外旅行市場の動向）最新刊

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。〇九年七月発行。

■観光実践講座講義録 最新刊

地域主体の観光～新しい時代の価値観を地域から発信する～

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。平成二十年度の講師は、浜名湖えんため代表・稲葉大輔氏、前安塚町長／観光カリスマ・矢野学氏、元紀南振興プロデューサー／有限会社伊勢福社長・橋川史宏氏、田野畑村役場・渡辺謙克氏、東北観光推進機構教育旅行アドバイザー／観光カリスマ・小椋唯一氏。〇九年三月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。

担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・5208・4704 http://www.jtb.or.jp

■温泉地再生

温泉好きの日本人が多いのに温泉地に元気がない、そのギャップへの疑問から始まった〝元気な〟温泉地の取材。さらにリーダーインタビュー、そして他分野のマーケティング調査など多様なデータをヒントに、温泉地の現代的・社会的な意義を探る。当財団主任研究員・久保田美穂子著 学芸出版社より〇八年六月発行。

※本書は、書店へのご注文をお願いします。

次号予告

●明年、藤原京から「奈良・平城京」に遷都して千三百年を迎えます。東アジアと交流した国際首都、平城京の歴史・文化と対話し未来に伝える取り組みを紹介します。

調査研究だより

●「観光・観光地の発展史」という視点で見ると、一九九〇年代後半以降の時代は「観光」が大きくクローズアップされ、「グリーンツーリズム」「エコツーリズム」「町並み観光」「産業観光」等々の地域の資源にさまざまな角度から光を当てた取り組みが、急激に盛んになった時代と言えるでしょう。

●十年ほど前に比べれば、観光による地域振興、活性化への期待が高まり、さまざまな省庁で観光に関連する支援事業がスタートし、「観光立国推進基本法」や「観光庁設立」に代表される国家的課題として観光が取り組まれる時代となりました。国・都道府県等による観光振興支援事業は大きく拡充し、多くの地域がこうした事業を活用しながら観光振興を進めるようになっています。

●一方で、十年を経過して、実際に観光による地域振興が進んでいるのか、支援事業の成果が上がっているのかといった「成果の検証」が求められる時期にきています。観光への取り組みはすぐに成果が出るものではありません。しかし、近年の観光への取り組み、国等による支援について、その成果を検証し、次のより良い取り組みに進む、といったプロセスは、わが国の観光振興にとって非常に重要なものです。

●当財団でも、単年度や中長期的な視点で観光振興やそれを支援する事業等を検証する調査・研究が増えてきました。こうした調査・研究を通じて、全国で進められている観光振興の「次のステップ」に資する研究成果を導けるよう、邁進していきたいと思います。（中野）

編集後記

◆高野山は二〇〇四年七月七日に、「紀伊山地の霊場と参詣道」のコアゾーンとして世界文化遺産に登録されました。ユネスコの世界遺産委員会が一九九二年に新しく導入した世界遺産の一概念「文化的景観」の日本初の登録認定です。

◆「文化的景観」は人間と自然との相互作用によって生み出された景観とされ、高野山は金剛峯寺、徳川家霊台などの境内と奥の院全体および周辺の森林を含めた自然景観が登録の対象となっています。高野山は今日に生きる大師信仰に根づいた伽藍・町並みと自然との調和が維持されている山岳宗教都市として稀有な存在と言えましょう。文化的景観はその土地を生かし続けることによって保全されます。高野山はまさに世界遺産として末永くその使命を果たさねばなりません。

◆桜が見頃の四月中旬に高野山を参拝の折、フランス人とおぼしき実に多くの個人客や団体客と遭遇。世界遺産登録、ミシュラン三つ星の威力を思い知った次第です。細川家縁の宿坊寺院・総持院に宿泊。高野山大学で勉学中の若き修行僧から受けた精進料理のもてなしが誠にさわやかでした。

◆『視点』を活用し、当財団が関係する観光の動きなどを朝倉主任研究員が主になって今後とも発信いたします。（宇八）

観光文化　第 197号

第 33 巻 5 号通巻第 197 号

発行日 2009 年 9 月 20 日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 1 鉄鋼ビル
〒 100-0005　☎ 03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 2 鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒 100-0005　☎ 03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ＩＳＳＮ　０３８５－５５５４